

特別会員リレー寄稿

シェイクスピアの面白さについて

作曲家 笠松 泰洋



まず、第 100 号の「広場」おめでとうございます。この記念すべき号に寄稿を依頼されたことを感謝致します。

私は、ところざわ倶楽

部のドラマティック・カンパニーで、かれこれ8年、ずっとシェイクスピアの講読を行ってきました。

ここ数年は、市民大学では専門の音楽、特にオペラなどについての講義が多かったので、どうして作曲家の私がシェイクスピア？と思う方もいらっしゃると思います。今年亡くなった蜷川幸雄さんの演出の舞台のスタッフとして、彩の国さいたま芸術劇場の蜷川さんのシェイクスピア全作品上演プログラムに初回から参加して、かなりの数のシェイクスピア作品の音楽を作り、稽古場から上演に至るまでシェイクスピア漬けの生活を長く送っていました。

蜷川さん以外の演出家の方々とともに、シェイクスピア作品を作り、今年の 10、11 月にも青木 豪さんの演出で『お気に召すまま』を上演したところです。

そういったこともあり、また、大学は文学部で、小田島先生をはじめとして、錚々たる演劇を専門とする先生方について学んだこともあり、僭越ながら、シェイクスピアの講読、そして朗読劇化を、演劇人としてところざわ倶楽部で行ってきました。

シェイクスピアは、やればやるほど、知れば知る程、奥が深くなる作品です。そして、その面白さの本質はどこから来るのか、それをずっと考えて読み、そして音楽を作り続けてきています。今日はここで、その中で最も大きなことだと思うところをお話します。

シェイクスピアの最大の特徴は、両方向的な視点です。例えば、『ヴェニスの商人』という有名な作品をとってみましょう。この作品は、強欲なユダヤ人の商人が、キリスト教徒に怨みをいだき、ヴェニスの街で最も成功し尊敬されているヴェニスの商人アントーニオを陥れ、それを、アントーニオの友人のバサーニオの婚約者の聡明なポーシャが男装して裁判官として登場し、お金の返済が遅れたことに対する対価としての「胸の肉 1 ポンドを差し出す」という契約の実行を認めながらも、その証文には、

血を差し出すとは書かれていない、ということ指摘して、「キリスト教徒の血は一滴たりとも流してはならない」という判決を突きつけ、ユダヤ人シャイロックの企みを阻止してアントーニオを救う、という話です。強欲なユダヤ人が敗北して善良な（友人を救うためにユダヤ人から借金した）キリスト教徒が助かる、という話です。

シェイクスピアが活躍した 17 世紀初頭は、まだまだキリスト教が絶大な権威と勢力を持っており、キリスト教に逆らってヨーロッパで生きることは不可能でした。あまり知られてはいませんが、ローマ教会から異端と見なされたプラトンの後継者プロチヌスを研究するギリシャ哲学の一派は、バクダッドに亡命し、そこで研究を続けています。ギリシャ哲学がヨーロッパで学問の中心とされたのは、ローマ教会が、アリストテレスとプラトンは否定せず、特にアリストテレスを推奨したのが大きな要因です。

ところが、じっくりと『ヴェニスの商人』を読むと、憎まれ役のシャイロックは、そのユダヤ人の立場から、キリスト教徒が、いかに非人間的なしうちをユダヤ人に繰り返しているかを、綿々と語らせるのです。「おれたちの手を切れば、赤い血が流れる。お前達も同じだろう。なら、俺たちは同じ人間ではないのか？」といった旨のことを彼は主張します。表向きは、あくまで、強欲な悪人という立場の人間が、これを語ります。これこそ、シェイクスピアが、この時代に物を申す巧妙な方法だと私には思えます。社会の敵役に正論を吐かせるのです。

同様に、タイタス・アンドロニカスという作品の中でも、野心的な若い黒人のエアロンは宣言します。「黒は美しい色なのだ。白鳥の足を見るがいい。あの黒は、いくら水で洗っても黒いままなのだ」シェイクスピアは、最も差別されている人の視点で社会を見て、そちら側の視線からの言葉を堂々と投げかけているのです。

これこそが、シェイクスピアの本音だったと私には思えるのです。一見、社会の常識の内側にいるように見せかけ、逆側から読むと、社会の裏側が明確に露見する、という合わせ鏡のような世界がシェイクスピアの世界なのです。そしてそこには、人間の傲慢さを戒める鋭い目が光っているのです。